

寺
ごよみ

一月

一 日 元旦会 年頭参り
三 日 日曜学校カルタ会
四 日 栗虫・御助成
五 日 栗虫・報恩講
七 日

御正忌報恩講

一 三 日 後一時 遠夜
一 四 日 後一時 遠夜
一 五 日 前十一時半 お講
後一時 遠夜
一 六 日 前十一時半 お講
後七時半 初夜
後一時 お満座

◇御正忌は親鸞聖人の御祥月命日の法要です。是非ともお参り下さいますように。なお、説教は、当山若院です。

寺報 善 巧

発行

〒938 富山県下新川郡
宇奈月町浦山497
白雪山 善 巧 寺
☎宇奈月 0765(65)0055

賀正

元旦や
今日のいのちに
遇う不思議

白雪山

善巧寺
法輪寺
照行寺



念仏の声を世界に子や孫に

お目出度う御座います。此の正月号で寺報善巧も、三十号になりました。夫々の頁の、記事も写真もお馴染みになり、皆様方に可愛がられて今日迄育って参りました。寺と門徒の間の、情報伝達機関であると共に、善巧寺教化推進活動の一翼を担う機能も果たして参った積りです。

用紙代、印刷費、写真代、取材費等々、若干の費用も必要で、皆様から頂く寺費の中の教化費から使わせて頂いており、此の点でも、文字通り皆様方の新聞であります。

情報の時代といわれていますが、皆様の御家庭でも、恐らく日々の新聞、雑誌、広告物など、印刷物が氾濫して整理に苦勞する有様ではないかと思われます。此の様な沢山の印刷物の中で、一年四回発行の「寺報 善巧」が、どのように取扱われているか。実は、私達としては大変気がかりなわけです。

毎号、お目に留めて頂いているかどうか。何かのお役に立っているかどうか。面白く読まれているかどうか。編輯の在り方にしても、文章の書き方にしても、其の他色々とお気付きの点も、多々あることと思います。

印刷され、配布された以上は読まなければならない役にも立ちません。所が、物資のあり余る今日、

寺報善巧30号

無駄に紙を使つて、読まれることなく捨てられる沢山の印刷物が私達の周囲に無数に見られるのです。善巧寺寺報に限っては、不要物資、廃棄物ではないと、確信しているのですが、皆様方の此の上の暖かい御支援が一層、必要とされるのです。八百年以前、親鸞聖人が、書き残された御手紙が、今日、残っています。

「真筆消息」十一通、「御消息集」六通、「末燈鈔」二十二通、「親鸞聖人御消息集」十八通、「五卷書」五通、「親鸞聖人血脈文集」五通の五部です。これらの御手紙は、京都から関東の門弟に御出しになったもので、聖人は東国に多くの門弟を残して、貞永、文暦の頃、帰洛され、聖人と門弟は遠く別れて住むことになりました。しかし門弟らは時に上洛して、聖人を訪ね或いは懇志を送つて師の生活を助けるなど、両者の間には密接な連絡が保たれていましたが、中でも、お手紙の交換が情報伝達を中心だったと思われまふ。そして、このお手紙は、情報伝達よりも、むしろみ教えの弘宣が中心でありました。寺報善巧が、この弘宣の役目も果たすことが今後の課題だと思います。

住職

雪山 俊之

室と筆と



明教院
僧 銘 伝

能所不二法体大行

本山勸学 山本仏骨和上

このたび、このお寺のご先祖である、明教院僧銘師の二百回忌のご法事をおつとめになるといふことは、大変、尊いことだと存じます。ところで、これからお話し上げますことは、「能所不二、法体大行」ということについてであります。みなさんはこういう言葉を存知かどうか分かりませんが、これは空華学派の学者の方々が使った特別な言葉使用でありますので、そのおいわれを申しあげたいのであります。

能所不二——この能ということとは能行ということで、私のお称名のこと、私がお念仏となえることを、能と申します。所というのは所行といひまして、仏のお名号のことをいふのであります。

で、私のとなえる称名と、仏の名号とが、不二という。これはなかなか意味深い言葉でありまして一つというのと不二というのは違います。一つというの、ものが

まったく一つになつてしまふのですけれど、不二というの、二つある、が二つあるまゝが一つ、一つあるまゝが二つという。こういうことが仏教で考えております深いものの考え方なんです。

私達はものを二つに割り切つてしまふか、あるいは一つに固めてしまふか、どっちかにしないと落着かない。けれども実際は、やはり二つあるものは二つある、二つある……たとえば親と子というの

は、二人いるに違ひない。が二人おるまゝが一つなんだ。また、家族でも同じで親子兄弟いろいろいる。一人一人別で、考えも別ですが別のまゝが一つの家族であり、一つの家族のまゝが別である。

一つとか、別とか、割り切つて考えてしまわないで、あるがまゝの実体をです、そのまんま、互いにとけ合つてゐるということですね、能所不二という。能とい

うのは私のお称名、所は仏の名号つまり、お称名は、そのまんま仏のお名号が私の口のお称名となつておつて下さる。私の称名と一つになつてしまつたのではない。その称名はそのまま仏様の南無阿弥陀仏の活動しておる姿である、といわねばならない。

私からいへば、私がお恩をよろこんでいるお称名ですけれども、仏さま側からいへばそのまゝが仏さまの南無阿弥陀仏の活動しておる姿である。そういうことを蓮如上人のお言葉では機法一体といわれます。

で、私の称名と、仏の名号とありながら、すべてのものを大きな如來さまの活動相とみるところに法体大行ということばがうまれるのであります。

法体というのとは仏さまのはたらきをいう。大行というのとは、親鸞

聖人のお言葉で申せば「往相回向を案ずるに大行あり大信あり」とこうある。どちらも大の字がついてゐる。この大の字をつけたということは単なる形容詞とか誇張してものをいふおとししたのではなくて、仏さまの大行とは、私に念仏せしめ、私の念仏となつておるまゝが、仏さまの行であるということとをあらわすんです。大の字は仏さまのものをいうことなんです。

信というの、大信というときには、我々が信じておるまゝが、私のつくり出した信ではなくして、仏さまのはたらきが信ぜしめ、信となつておつて下さるのであります。そういう仏さまのはたらきをあらわすために大信と親鸞聖人はおおせられたんです。

ところで、私は先程、機法一体ということをお話ししましたが、この言葉は大変内容のある言葉でありまして、いろんな意味が含まれてゐるのであります。仏さまはね、仏と人間と二つあるがまゝ一如であるところなんなんです。そういうことがどこでわかるかといひますと、第十八願のお誓ひにね「若生者、不取正覚」とある。

もし生まれれば正覚をとらじ——みなさんはこれをどう味わつていなさるか……

はつきり申しますとね、仏さまというお方はね、自分一人だけでは、さとりを開くことができないのです。いいですか、これがまあ仏教の本義であり、空華学派の人たちが真剣になつて申されるのもそこなんです。仏さまはね、自分一人だけでは仏になれない。他の人を救ふんことには仏さまはさとりを開くことができないんです。みなさんはひよっとすると、仏さまはご修行なさつて、自分の煩惱をなくして、それでさとりを開くのが仏だと思つておら

大いなる仏のはたらき

信といふのも大信といふときには、我々が信じておるまゝが、私のつくり出した信ではなくして、仏さまのはたらきが信ぜしめ、信となつておつて下さるのであります。そういう仏さまのはたらきをあらわすために大信と親鸞聖人はおおせられたんです。

寺ごよみ

二月

- 一日 お講・浦山
- 七日 三日市・報恩講
- 九日 〇日
- 一四日 生地・获生・報恩講
- 一六日 お講・下立
- 一六日 音沢・ご助成
- 一七日 下立・報恩講
- 一八日 舟見・報恩講
- 二二日 入善・泊・報恩講
- 二四日 析屋・熊野・報恩講

れるかも知れません。それは全然間違ひとはいひませんが、自分だけが悟つたという仏はね、小乗仏教の仏さまなんです。いいですか。大乘仏教の仏さまは、そうはいかんです。

これはね、天親菩薩が書きになつた浄土論のなかに出ておる。「自信利益功德力成就、利益他功德力成就」といふお言葉があつて、これは、仏さまは自分だけ修行して悟つたらしいというのじゃない。他の人を救ふなければ悟りが開けないのだとおつしやるんです。いいですか。すべての人を救つてしあわせにしなければ、私は悟りの仏とは呼ばれない、とお誓ひになつてゐる。ここが仏教の仏さまと

神さまとの違い目です。神さまというの、自分が高い神の地位について、すべてのものを上から見下している。仏教の仏さまはそうじゃないんです。すべての人をしあわせにしなければ、私は悟りの仏と呼ばれない、とお誓いになつてゐるんですよ。それがこの、若くは、不取正覚というお言葉なんです。親鸞聖人の他力という本義もそこにあるのであります。

聖人のこういうお考え方を、天台宗では「自行の因果、化他の能所」といつている。どうということかという、この世界というものは、自分一人では生きてゐることが出来ないんだ、他の人と助け合わねば生きることができない。それを、縁起の世界といひます。あなたがた、縁起があるのかい。けれど、あれは間違ひ。縁起というのは、よるということ、起というのは、起こるということ。すべてのものは、よって起こつてゐる。一つだけで成立してゐるものは何もありません。我々一人だけじゃ生きてゆけませんよ。いろんな人に助けられてこそ生きることが出来るんだ。それでしょ。それが事実とわかつたならば、他の者を助けて自分だけ生きるといふ考えは間違ひなんで、他の人びとにできるだけ奉仕をしてゆく中に、我も他人も共に生きてゆく世界があるのであります。

これこそが本当の平和の実現に

もつながるのです。いまごろは、平和平和というてケンカをしてゐる、そんな平和はどこにありますか。そういう点を私たちはもう一ぺん本気で考えねばならない。だから、自行の因果、化他の能所といふことは、自分だけでは半分、他の人をみてこそ丸いマルが出来るんですよ。

そこで、他の人のしあわせを願ひ、助けてゆくことを拡大してゆけば、自分がまたそれだけ大きくなつてゆく。そして自分が大きくなると、また半分欠けてくるからまた他のものを救わねばならない。他人を生かしてこそ、自分が拡大してゆくのでありますから、これが、自利、利他、自、他……と無限に発展してゆく

称名のままが仏の名号

くのが本当の世の中のあり方であります。

その自他というものが互いに助け合つて拡大してゆくという思想が親鸞聖人の他力の思想のもとなんですよ。

そこを第十八願に「若し生まれずば、正覚を取らじ」とお誓いなさつたんです。すべての人が救われて、しあわせにならなかつたら私は悟りの仏とは呼ばれまいと、これを、さらに簡略にいうと、「若くは、不生者」は「南無」にあたり、「不取正覚」といふのが「阿弥陀仏」にあるのであります。

このようにして、南無阿弥陀仏

という名号は、つねに自他不二の真理を根底として、仏のはたらきをそのまんまを私にあたえ、私は仏のはたらきを仰ぐことによつて救われてゆく、これを機法一体ともいふのであります。このへんをみなさん、よくかみしめて味わつてもらいたいと思うのです。

ところで、よくみなさんから、ご信心がただけじゃないとか、ご安心がただけじゃないという質問をされることありますが、私は、命をうけて二年間、本山総会所のご示談係をつとめたことがあります。が、そのときも必ずこの質問です。お慈悲は聞くけど、どうもご信心がつかめませんなどという。そういうことばっかりいうとる人は、

何年聞いとつたつてだめ。いいですか。はつきりしなさいよ。そんなこというとつたら、何十年聞いてもわかりません。そういう考えのワケをはずさずにやいかんのです。もう一つ進んで、わたしを救うて下さる親さまは、どういふはたらきで私を救うて下さるか、そのお

ころを聞かねばならんのです。さて、そのお心と申しますのは、こういうことになるんです。

如来さまは南無阿弥陀仏を成就して、むこうにじつと立つて、信ぜよというてなさると思つてなさるか。そんなじゃないよ。信じたらこれをやるぞと、むこうで呼

んでおられるように思うか、それは大まちがひ。

信ぜよという仏と、信ずる私が対立して、両方から合わさつてゆくなどというのは機法一体ではなくて、出合いがしらの機法合体だ。そんなことは真宗のご法義にありませんよ。

如来さまはね、そんなじゃないんだ。如来さまは、自分の成就なされたお悟りは、衆生をはなれて自分だけのものじゃない。もし生まれずば、すべてのものが救われてしあわせにならなければ、という、そういう条件の中に出来あがつた仏さまでありますから、じつとむこうにおられるのではなくて、私にはたらきかけて、私の中へ入り込んで下さる。

その如来さまのお心が聞こえたら、私もはただ、仰ぐより他にないのであります。

だから、親鸞聖人は、ご信心を「頂戴」といふことばであらわされてゐます。そういう尊いおはたらきが聞こえたら、仰いで頂戴する他にないのであります。ここまでも世話下された、何も私の方からいふことはない。ただ頂戴する他ないのであります。

これがご開山聖人のお示し下された信心の世界なのであります。ですから、この聖人の信心の世界をいただきますと、私は私どもに向かつて信ぜよといつておられるだけじゃない。仏さまは私どもの

ところを下りてこられて、そうして、南無阿弥陀仏をしみこませて下さるんです。だから仏さまは、信ぜしめ、行ぜしめ、信となり、行となりきつておたすけくださるのであります。わかりましたか。

それをね「能所不二」といふんです。いいかね。明教院和上がおつしやつたのはそういうことです。よ。そして、そういう大きな南無阿弥陀仏のはたらきを、「法体」といふんです。その法体は、仏さまの大きなお仕事であるから、「大行」といわれたんです。そこを本当に聞かせていただいたら、我々はただ、うれしいという他ないんです。どうなつたら、どうなるかは、はからいんです。定散自力のはからいとはそれよ。ただただ仏さまの機法一体の救いを聞けば、うれしいという他ありませんよ。

重ねて申しますが、仏さまをむこうにながめて信じようとか、どうしたらただけるとか、どうなつたら救われるとか、そういうはからいはいらんのです。如来さまのたいなるはたらきが聞こえたら、ああ、なんという尊い！ おかげさまで救われてゆきますと、仰ぐより他はない。頂戴するより他にない。それがご開山のおつしやつた機法一体の意味。空華先哲の申された、能所不二、法体大行のころなのであります。

五十七年十一月四日

（空華二百回忌記念講演）

1984(昭和59年)
法語カレンダー
妙好人の世界



命のあらんかぎり
ゆだんあるまじき事

真宗教団連合

西本願寺 専修寺 弘光寺 興正寺 錦織寺 孝悌寺 誠照寺 證誠寺

年頭参りにお越しの方に、毎年差上げております「法語カレンダー」——今年はさし絵が若院の母、利井晃子さんの俳画です。またこの暦の法語の解説書「妙好人の世界」(本願寺出版)には、若院が執筆しています。ここにその表紙のことは「命のあらんかぎり ゆだんあるまじき事」(赤尾道宗)についての法談を紹介いたします。

一日一年飢渴寒暑

カレンダーをもらうと、なぜか一ぺんバラバラと、十二月までめくってみなくては気がすまん、という人がいます。私もその一人なんですけど、ありやいったいどういうことなのでしょうね。

「日付けが間違っているかもしれない」こんな人はおらんでしょ。まあ、ほとんどの人は、そこに印刷されている絵やら写真やらことはやらを、サラッとながめて、このカレンダーならどこへ吊るそうかなどと考えられるでしょう。

ではこの真宗教団連合の法語カレンダーはどうか。なかなかありがたいたことが書いてあるし、そまつになつたもつたない。というわけで、お仏間のわきに掛けられる方がけつこう多い。その他は、まあ茶の間の柱とか、年寄りの部屋とか……。これはもう、どこだっていいわけですが、できることなら、毎月キッチンとめくってほしい。いや、ときどきあるんです。半年たつても、まだ「命のあらんかぎり、ゆだんあるまじき事」と

いう表紙のまんま、お仏間に下がってなんぞで……。こんなお宅で、ゆだんあるまじきこと、なんて話はしにくいよね。

さあ、あんまりいらんことばかりしゃべっていいないで、話をこの月々のことばに向けさせていただこうと思うわけです。まあ、それにつけても、私ら毎日とにかく朝から晩まで、いらんことばかりしたり考えたりしているようでありまして、この表紙のことばにいたしまして、赤尾の道宗さんは「後生の一大事、命のあらんかぎり、ゆだんあるまじき事」とおっしゃっているんですが、アタマの後生の一、大事が抜けてしまうと、ついついこのお言葉を「油断するな」だけにおさめて、「今年もまた、家族一同、この表紙のことばにもあるように、油断しないで気持ちを引きしめて、がんばりましょう」なんていつたりする。挙句に、油断大敵、火がボーボー、戸締まり

用心、火の用心……。こんなことをいうと、不謹慎だとしかられるかもしれませんが、でも、だいたい私たちの日暮らしの中で考えることって、それぐらいのことじゃないですか？ いや、ハラを立てていらつしやるあなたは別として。

おしやか様は、そういう私たちのことを「仏本行集経」というお経のなかで、こうおっしゃっている。人間の営みの中で一大事は「飢渴寒暑」だと。キカツカンシヨ。つまり、一日の一大事は、飢えと渴きであります。ハラへつた、ノドかわいた。これはっかりでしよう、私たちの毎日の大さわざは。

奥さんは朝昼晩、飢えと渴きの家族をいかにして満足させようかということに身をけずっていらつ

越中赤尾の道宗さん

さて、赤尾の道宗さん。縁あって、昨年、寺の聞法旅行で、越中五箇山行徳寺にお参りさせていただきました。山また山のすごいところでした。おつとめのあと、住職さんの案内で、本堂余間の「道宗の木像」を見せていただきました。話には聞いていたし、写真でもよく拝見したことはありましたが、割り木の上に寝ころんだ道宗さんの木像を目の前になると、な

しやるし、旦那様はこれまた、家中のものを養うために、日夜仕事にはげんでいらつしやる。子供は子供で「おなかへつた」、「なんかない？」とやっている。

そして一年を通じての一大事は「寒暑」。そう、寒い暑い、クーラーだ暖房だ、日当たりのいいマンションだ、建て売りだ、ということまで七転八倒なさっている。

一日の一大事が「飢えと渴き」一年の一大事が「寒い、暑い」では、もうちよつと長いところで一生の一大事は……といえば「生と死」の問題になってくるわけですが、残念なことに、私たちは、一日、一年、ちようどカレンダーと同じサイクルで、あくせく、もたもたいらんことばかりやっているのではありません。

にやら、胸がキュンと痛くなる。

「わあ、すごいなあ」

「痛かったやろなあ」

住職さんのお話を聞きながら、ご一緒した門徒の方々も、感謝の声を発し、お念仏申される方もある。

本堂そばの記念館には、いろいろな展示品と共に「赤尾道宗心得二十一箇條」がある。

「ごしやうの一大事のちのあら

んかぎりゆだんあるまじき事」

機方志功さんは、このことばと、割り木の木像を合わせて、版画をものされていきます。これの写しをいただいて、帰りのバスの中、聞法旅行のお仲間、さまざまな感想をもらされる。

「割り木の寝床か……わたしら毎日、ふかふかのフトンに寝て、ありがたいとも思わん暮らしを、してましたなあ」

「やっぱり、真宗の信者にも、あのようなきびしさがないといけないでしようかねえ」

「そりや、大事なことですよ。あれがないから、いろいろまわりからいわれるんじゃないですか」

なかには、叡山の千日回峰行まで引き合いに出して、もつときびしく自らを律していかねば、これからの教団は……などという人もいます。そういえば、たしか、鮮妙和上もそんなことをいい残していたように思う。信後の念仏者は、禅家の風格を持って、とかなんとかな……。

いや、本当に、尊いことであります。如来のご恩を忘れぬように、割り木の寝床で自らを痛めつけ、目覚めては念仏申されたという道宗さんの心ばえ……。

しかし、行徳寺の住職もおっしゃっていたように、あくまでこれは道宗さんの信相続の姿でありま

して……といいつつ、どうもこのあたりから歯切れが悪くなってくる。というの、なんといつても、われらが道宗さんの求道の姿がすばらしいからであります。私もやっぱり、あのようにになりたいという心を、どこかに少し持っている。しかし、現実には飢渴寒暑で、ただただ、いたずらに明かし

油断を油断と知らぬが私

カレンダーで思い出すことなんですけど、どこかの会社のカレンダーで、百年分を一枚に刷り込んだのがありました。あれはじつに迫力がありましたね。私の生れた日も、ちゃんとある。曜日もわかる。「わあ、すごいなあ、これはおもしろい。なかなかのアイデアだね」

とかなんとかいつていたけど、はつきりいつて、あんまり評判はよくなかった。それが証拠に、あれ以来、このカレンダーを見かけなくなりましたもんね。

ところで、じゃあいつたい、何が評判よくなかったのかと申しますと、やっぱり、これは、後生の一大事と関わるのでありまして、このカレンダーの日付、年月の中で、必ず自分の死を迎えるということに気付くからであります。

「おれの命日は、まあ、このあた

いたずらにすごしているばかり。教団がどうのとか、念仏者の生活はかくあるべきとか、そんな大きな話ではなくて、この私の問題として味わってみると、道宗さんのような生き方を見ると、はつきりいつてシットを覚えてしまうんですよね」。

りかなあ。いや、もっと早いかもしれんなあ。ハハハ」などと、冗談めかしていつてるけど、あんまり気色のいいもんじゃない。そのうち、このカレンダーを見ると目をそらすようになって、しまいに

「おい、つまらんカレンダーかけとくなよ」てなことになって、百年カレンダーは姿を消したようであります。

というわけで、いまやこのテのカレンダーしか売れません。それは、一年三百六十五日、その一日一日に、良い日、悪い日、気をつける日などと、わけのわからん良時吉日を刷り込んだカレンダーであります。

バカバカしい。日に良い日悪い日があろう

はずがない。親鸞聖人は、そういうことを一番きらわれたお方だったじゃないかと、いくらいつてもおかまいなしであります。

しかし、これも考えてみると、結局、われら凡夫の欲望サイズにびったりなのであります。飢えと渴きの一日、寒い暑いの一年を、ごまかしごまかし過ごすには、ついたとか、つかんとか、運だ、不運だといつてぐるぐらが、認めるわけじゃないけれど、ちようどほどほどのなかもしれない。

そして、油断はないか？ と問われれば、

「油断ばかりの私であります」などと答えるこの私——これも

おかしいよねえ。油断を油断とわかったら油断じゃないもの。わからんことを、わかったような顔して答えているだけだから、問題なんじゃないかしら。まあ本当の私

というのは、そんなものじゃないですか。もしそうではなくて「油断するな」のひとことで、「ハイッ」とキッパリ、命のあらんかぎり油断せず、後生の一大事を心にかけて生きられる私なら、阿弥陀如来様はお出ましにならんでもよかったですね。

でも、迷いを迷いと知らずに、迷っている私がいるからこそ、如来様はいらっしゃる。目覚めさずにはおかんと、はたらいで下さっているのであります。そっちにごまかしがあらうとも、こちらに少しのごまかしもない。そっちに油断があらうとも、こちらにみじんの油断もない、とおっしゃっているのが如来様であります。だから、たよりになるんだなあ。だから、こんな私でも安心して生きていられるんだなあ、私は今日もまたうれしく思うのであります。

妙好人の世界

一月々のことは



本願寺から出版された「月々のことは・妙好人の世界」は、若院の他、以前、善巧寺にお越しいただいた行信教授、教授 梯(かけはし)実円先生、それに山科別院輪番の川上信定師、仙台別院輪番の松山善昭師が執筆なさっています。どなたにでも親しんでいただけの法味愛樂の書としておすすめします。一部五百円。寺にあります。

聞法の秋・空華忌

11月
4,5日

明教院さまの祥月法要―空華忌が、十一月四、五の両日つとめら



れました。この法要は、僧鎔師二百回忌大法要を機縁にして、空華忌と名付け、末代に至るまでその遺徳を語りつごうと催されたもので、今回が第一回目。教化推進協議会の方々の熱のあるご協力によって、たいへんありがたい、心あたたまる法要となりました。

四日はお建夜で、午後七時半から。みんなでお正信偈のおつとめをし、明教院さまの歌を合唱したあと、空華学派の流れを汲む、行信教教授の高田慈照先生のお話



を聞きました。親鸞聖人の「帰命釈」を、やさしく、わかりやすくあたたくお話し下さって、お参りした門信徒の方々は、ほれぼれと法悦にひたつたことでした。

つづく五日は、明教院僧鎔師の二百一回目の祥月命日。午前七時にお晨朝。十時からはお日中のおつとめ。そして、高田先生のお話。午後一時のお満座には、講内の

法中方も参勤下さり、黒衣に黄五條の装束で内陣に出動。住職が明教院の生涯を表白したあと、僧俗ともに阿弥陀経を読み、最後に、高田先生のお話を聴聞して、聞法の秋にふさわしい、しみじみと心あたたまる法要を終えました。

ご正忌と報恩講

は親鸞聖人のご法事、祠堂経は門徒の先祖のご法事、いずれも代々つづく伝統の年中行事であります。これに新しく加わった寺の明教院さま



また、境内には、浦山新の鬼原さんから、数十鉢のキクが届けられ、参拝者の目をなごませて下さいました。

十二月二日 陰
庭の山茶花が咲き続く。わが家の山茶花の樹は、廊下の屋根を越える丈の三本並んでいて、見上げる高さに白い花を仰ぐ形である。花の無い季節に、長い期間目を楽しませてくれる。此の他に、山茶花の生垣があり、七十本ほど、魚津にフワワー・シヨップを持つ門徒の方に植えて貰ったのがあるが、これは数年前の若苗で、未だ蕾のままである。この方は赤い花だ。

歳時記には、「茶梅とも書く。椿に似て、椿より淋しい感じの花である。晩秋から冬にかけて咲く。白色、或いは淡紅で葉は真黄である」とある。私の好きな木であり花である。

先日、嵐で散乱した杉の小枝・

落葉の掃除は、どうやら片が付いたが、もみじの落葉の方は、昨日の雨に濡れて、そのままになっている。

約束の十時前に、舟見から六人、寺詣りに来られる。昨日の葬式の焼香詣りである。仏は、明治二十九年生れのお婆さん。長寿会、合掌会の弔辞があり、満堂の弔問客だった。眠る



住職日記

本新の報恩講に廻っていたのが、明日の三軒をすませて、一時帰院して、おつとめに参加する。

午後から風が吹き出す。ガラクタもので、乱雑になっている机辺の整理を始める。遊び半分なので、思うように捗らない。古い写真が出て来る。亡父の一高時代のもので、本郷二丁目、弓町の写真館で撮ったもの。十二名の制服制帽の若い姿に、ありありと明治時代の覇気が偲ばれる。腕を組んでいるもの。帽子をかぶっているもの。脱いで手に持っているもの。上着のボタンを外して、懐中時計の鎖が見えているもの。

写真の裏面には、夫々のサインがある。墨痕鮮やかな達筆で、「福岡土族 吉田節太郎 英法科」「八雲立つ出雲の住人 木村統一 英法科」「高知県人 電工科生 山本忠興」「鹿児島県文・英 上村清延」等々、此処にも、全国から笈を負って上京して、天下の一高生を自待する気鋭が見られる。小生の太正十二年三月の小学校卒業写真も出て来る。半世紀以上も昔の懐かしい面影である。夕食・入浴、就床九時。

山茶花は
ほつりほつりと咲続き
山茶花や 白色白光
今朝の冷え

寺
ごよみ

三月

一日 お講・浦山
二日 浦山・報恩講
一日 太子会
一六日 お講・栃沢
二〇日 教化推進協議会
浦山の報恩講は今年も三月にさせていただきます。ご了承下さい。

み光の中に生きるよろこび

全国寺族婦人代表総参拝



代表として、本波ヒサさん、栃沢はるさん、河村としいさんが参加しました。

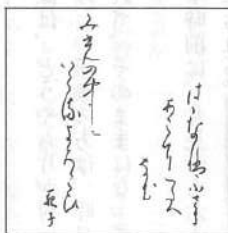
一行は十二月九日あさ、富山を出発。京都のご本山につくと、さっそく総御堂に参拝。山口、大分の参拝団と一緒に「真宗宗歌」を合唱し、館照道先生の講演を聞き、範子裏方のおことはをいただきました。

十日は

前裏方、当門主、裏方、本山総務を

いま西本願寺では、全国の寺族婦人代表の総参拝が行われていますが、十二月九、十の両日、黒西組参拝団の一員として、善巧寺、法輪寺、照行寺の三坊守と、門徒婦人の

活発な話し合いを



12月9・10日

行いました。お晨朝のあと、国宝

の書院でご会食。袴姿のお給仕に緊張の連続だったそうです。また、国宝飛雲閣でお抹茶の接待をうけるなど、心のこもったおもてなしに感激の二日間だったようです。

本波ヒサさんは「なみだの出るほどうれしかったです。意見発表のときは、私も善巧寺の白鶴会のことなどをお話ししようと思ってましたが、胸いっぱいでした」

栃沢はるさんは「本当に結構なお参りでした。お聴聞したことをこれからの生活のなかで生かせたいと思います」

河村としいさんは「神と仏は別。迷信にまどわされないようにというご門主のおとしを、心にきぎと、それぞれのよろこびを話して下さいました」

なお、ここに掲載した色紙は、範子裏方のお歌で、

ははなれば 小さきあこにつたへなむ
み光の中に 生きるよろこび

というもので、仏教婦人としての自分を全うされんことを願われてお詠み下さったものであります。

若ハンも奨励賞!!

魚津市を中心とした県東部の若手経済人で組織している、新川経済倶楽部（生駒晴俊会長）の第一回「新川地域発展賞」に、寺の若ハンが選ばれました。

受賞者は一団三個人。故池田弥三郎さんの特別賞、富山職業訓練短大の大賞、奨励賞にスポーツの竹田賢二さんとならんでの受賞。夢を語る会や雪ん子劇団の活動が評価されたようで、ようこそようこそ、うれしいかぎり。受賞式は一月六日、ホテルサンルートで行われます。

雪ん子 三年連続受賞!



「ことばの教室 雪ん子劇団」は十月、富山県芸術文化協会主催の「こどもフェスティバル」に参

加。演示部門で堂々、奨励賞を獲得しました。

昨年は劇団の父母の会「夢を育てる会」も発足して大張り切り。新世紀博出演と同じ出し物のミュージカル「こどものまつり」を、県教育文化センターの大ホールで力いっぱい演じ、大賞は富山大学生の人形劇にさらわれたものの、見事、奨励賞に輝き、三年連続受賞の記録をつくりました。

善巧寺の常例行事

お日曜学校	毎月 一日・十六日
雪ん子劇団	毎月 第四日曜日
壮年會	毎週 月曜 四時
婦人會	毎月 第二土曜日
お経の會	毎月 第一月曜日
	第一・第三土曜日

合掌



おぼろさん いらいっしやいと
ホンコさんの折、こんなかわいい
絵を描いて迎えて下さったのは、
東布施保育所のライオン組、丸田
おりえちゃん（五つ）です。

おつとめのあと、お焼香もちや
んとして「まんまさま」におまい
りし、お茶とお菓子の接待まで。
ほのぼのと心あたたまるひととき
でした。

念仏の声を世界に子や孫に――
むずかしいことではなくて、おば
あちゃんやおじいさん、おとうさ
んやおかあさん、子供たちはあな
たのする通りに、まねてゆきます。
朝に礼拝、夕べに感謝――今年
もお忘れなきように...

